

磯の香の強し匂へば日に干せ網もむしろも海のものなり
この松は浮世繪の松此の家は浮世繪の家千々石美し
徐ろに過ぎ行く時の底知れぬ方に怖ちて我旅にあり
すたすたと濱に出れば空曇り悶あらく砂ほてり居り
かにかりに一年あまり世にすねてよみがへりたる夜のマドンナ
まなし笑み輕げにあぐる爪先の見眼せはしき我なりしかな
雨あがり靴底深く夜を踏みて辿れば水にうつる町の灯

短歌五首

一部丙二年 和田貞臣

立太子禮を祝ひ奉りて

幾ちよとかきらぬ田鶴の聲すなりいや榮わゆくみよのしるしに

新開大神宮にて敬神黨志士を偲びて

古の人なつかしく思ひねの枕にかすむ春の夜廻月

太神宮參詣の途次薄葉の渡にて

神の森見ゆる薄葉の薄衣そよ吹く風はあやに涼しも

亡き人を偲びて

今は只夢の如くそ思ほゆるたのしかりしもうれしかりしも
ねても憂しさめてもつらし我を撫て我をいたはる人しなければ

なつくゝ

文 二 夢

四

郎

寂しみの音や立つらん青白く月に照り出でし貝殻の道
吾と吾が臚の影を踏みて行く更けにし月のうすらあかりに
近づかば吾が幻は破れなん遠く離れて獨り忍ばん
眞暗な心の囚獄遁れんとたゞわけもなく郷里を出でたり
一本の残りし煙草味ひぬ淋しさに堪へで旅の男は
たまさかに街に出づれば仄暗く夜店ならびて耐へ難き哉
なにげなく見上げし眼に大西郷そゝりて立てり眞晝の上野
今や去る双の眼にいたましく都の臺そゝり立つかな
悲しきは列車につきし煤煙を洗ひ落して日を送る人
硝子窓にそつと息吹きて思ひ出の小さき印象しるして見たり